

2010
No.572

10

月刊 漁業と漁協

運動としての経営・ささえる実務



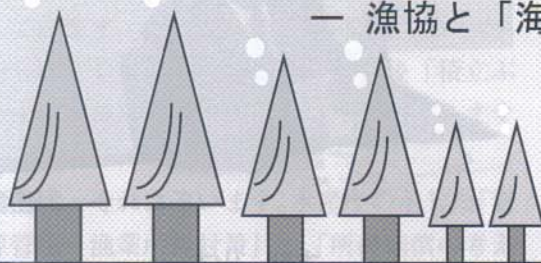
- ◆連続対談・漁協史の一齣（第3回）
－漁業所得安定対策と「きよさい」拡充運動により
漁業経営の再生を－ 猪苗代健一氏
- ◆なぜ海の森づくり運動が重要か
－漁協と「海の時代」のモデルづくり－
- ◆韓国では刺身マグロ消費が増加
－ソウル市民を対象に意識調査を実施－
- ◆この国の魚介消費に何が起きているか（第3回）

漁協経営センター出版部

ISSN 1881-4352

なぜ海の森づくり運動が重要か？

— 漁協と「海の時代」のモデルづくり —



松田 恵明

(NPO 法人海の森づくり推進協会代表理事)

はじめに

日本には、6,300 にのぼる漁村が南北3,000kmに延びた国土の中で地球円周の85%に相当する35,000kmの海岸線に分布して、多様な環境の中でユニークな水産とつきあっています。そこには、世界でも類を見ない水産を振興するための漁港や道路・建物といったハードと漁協・漁業法等といったソフトインフラが整っています。賢いアプローチをすれば、適切な投資で活性化が図れます。

世界が日本に求めているものは、「日本にしかできない国際貢献」です。とすれば、それはいま流行の自動車・家電・金融・漫画でしょうか？世界が日本に求めているリーダーシップとは、日本国憲法に代表される平和主義と「海の時代」のモデルづくりではないでしょうか？ここでは、漁協と「海の時代」のモデルづくりに焦点を合わせて述べさせていただきます。

多面的機能（安全な水産物の安定的供給、物質循環、環境保全、国民の生命財産保全、保養・交流・学習、漁村とその文化継承、辺境での所得と雇用機会の提供等）を果たせる日本の漁村は、「海の時代」の世界、特に人口が多く、魚種も多様で、水産依存度の高い漁業と漁協 2010・10

アジアの漁村のモデルとなります。

1. 漁協とは何か

漁業法や水産業協同組合法（水協法）は日本オリジナルの法律で、その基本は、「海の時代」における賢い海の利用モデルとして世界中から注目されています。そういった法律は、終戦直後、水産業及び漁村の多面的機能が高く評価され、国民は共同漁業権の設定に合意し、漁協の公的機能に期待し、私的な漁協を準公共機関のように扱ってきました。

漁業法は、「漁業者及び漁業従事者を主体とする漁業調整機構の運用によって水面を総合的に利用し、もって漁業生産力を発展させ、あわせて漁業の民主化を図ることを目的とする」ものです。一方、水協法は、「漁民及び水産加工業者の協同組織の発展を促進し、もって、その経済的社会的地位の向上と水産業の生産力の増進とを図り、国民経済の発展を期する」ことを目的としています。

しかしながら、現状は、恰もこれらの法律が機能していなかったかのごとく、これらの目的から大きくはなれて運用されてきました。そこには、漁業内部の問題だけでなく外部の問題も大きく係わっています。つまり、沿岸漁業の荒廃は高度経済成長を選択した国民全

体の責任でもあるのです。戦後百万人以上いた漁民は、今や20万人を切り、漁村は、高齢化と過疎で起死回生が迫られています。これまでのやり方をリセットし、再出発する必要があります。そして前浜は、管理さえ上手にできれば、その経済的価値は、今の10倍、100倍、1000倍となる可能性を持っています。現在の日本でも、漁民の年収が出稼ぎあるいは200-300万円から数千万円まであり、借金漬けの沿岸漁家から1億円以上の貯金を持っている沿岸漁家までがおります。やり方次第なのです。したがって、起死回生をめざして、真剣に水産増養殖を考え、大幅なコスト削減に踏みきらなければなりません。また、多様

な前浜の研究は、北海道猿払漁協や野付漁協のように、国・県・大学等の研究者に期待するだけでなく、漁協の責任として取り組むべきものです。

つまり、多面的機能をもつ責任ある漁民人口を百万人にするためにはどうしたら良いかに全世界の叡智を結集しなければならないのです。多面的機能が果たせ、経済的機能を持ち、漁業管理を責任とする漁協であれば、その前浜で赤潮や青潮や磯焼けや自家汚染・乱獲などは無かったはずで、社会が期待するそういった漁協であるためには多くの課題を克服しなければなりません。



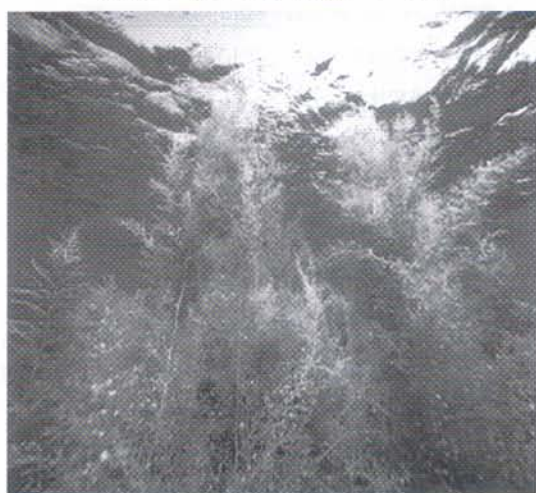
壱岐のこんぶ (平成 19 年 4 月)



壱岐のこんぶ (平成 21 年 4 月)



第3回 こんぶサミット in 壱岐 の様子



ホンダワラ水中写真(07年4月渋谷正信撮影)

2. 漁協に課せられている課題

私は、1960年代の北大学生時代に、元道信漁連会長・元全漁連会長で「安藤の辻説法」で有名な故安藤孝俊氏にめぐり合い、それまでの苦労話を聞き、『漁村に生きる』をはじめ多くの講演集を勉強させていただきました。「漁業というものは、流れてくるものをタダで撮るのだといった誤った認識、泳いでいるものをつかむのだから、こんなボロい商売はないと片づけてしまったりするのは、とんでもない話です。」と続きます。北海道漁民の貯蓄性向はずば抜けて高く、リスクに強い北海道沿岸漁業が、北洋漁業を無くした北海道漁業の担い手になっていることも安藤氏の存在と深く係わっています。私も学生時代に常呂漁協の小笠原敬氏や野付漁協の宮越充専務に初めてお会いしたのもその頃です。安藤氏が漁業の現状を今観察されたらどれだけ失望されたことか考えるだけでも恐ろしくなります。次から次と現状に対する質問が出てきます。例をあげれば、

- 1) 不漁が3年続いても乗り切れるだけの貯金はあるか？それが無いものは漁業者の風上におけん。
- 2) 漁業グループ毎の勉強会や機能的な勉強会は機能している？
- 3) 漁業調整委員会は機能しているか？
- 4) 前浜の研究体制をもっているか？
- 5) 赤潮・青潮・磯焼け・乱獲などの問題は無いか？
- 6) 暴力団は関係していないか？
- 7) 後継者問題はないか？
- 8) 地方自治体・県（行政・水産試験場・改良普及員）・国との関係は機能しているか？
- 9) 県漁連・全漁連との関係は機能しているか？
- 10) 共同漁業権内の管理は適正になされているか？
- 11) 栽培漁業・藻場造成は実をあげているか？
- 12) 協同の精神は生きているか？
- 13) 水産業・漁村の多面的機能は発揮しているか？

皆さんは、これらの質問にどう答えられるでしょうか？

3. 海の森づくりの重要性

私達の活動は、漁協を中心とした海中林造成と施肥による藻場造成からなる海藻生産と「生産物の利活用」を結びつけた持続的な「海の森づくり」の勉強会を通して、漁民・漁協の前浜の合理的・効率的活用による収益向上と後継者の育成を目指しています。沿岸域は多様です。改善方法も多く、その全てを生かす方法を皆で考え、やれるところから行動に移してゆくことが必要です。そして、今がそのチャンスです。

「海の森づくり」の過程で、海藻は海中の窒素・燐・二酸化炭素を吸収し、酸素を供給して海洋環境を改善します。同時に在来種には付着基盤を与え、生物多様性を促進し、天然の水産資源には産卵場や揺籃場を提供し、栽培漁業種には隠れ家を提供します。そして、漁業者を自ら「考える漁民」や「前浜の第1線研究者」に転換します。

当協会の「海の森づくり支援事業」は主に、「こんぶ」の種糸幹旋と硫酸第1鉄を主成分とする共同施肥試験の実施です。その中で、なぜ、コンブ？と良く聞かれます。多くの海藻は、大量に生産できないか、できてもその生産物の利活用が難しいのです。その点、日本人に昔から馴染まれているコンブは利活用の面で抜群です。栽培技術は確立しており、大量生産も可能であり、収穫物の利活用の面では、食品としてだけでなく、薬品、餌料、飼料、肥料、工業、バイオマス燃料、化粧品原料など利用価値は極めて高いのです。また、私達はコンブにこだわっていません。しかし、海の森づくり運動を持続的に進めてゆくには、経済性が問われます。利活用の可能性が高い

ことは、素晴らしいことです。コンブの成長は熱帯雨林に匹敵するといわれますが、その環境保全効果や水産増殖効果など公共的な効果はある程度の規模が伴わなければ目に見えません。従って、公共事業費を節約しながら、自助努力を促進して行く必要があります。また、それぞれの場所に合った海藻・海草の種類とその高付加価値のある利活用と結びつけながら、「海の森づくり運動」を進めてゆく必要があります。一方、生産物の利活用に関しては、現在、原料の輸入価格と日本での生産コストの間に大きなギャップがあり問題となっています。

施肥による天然藻場造成はもう一つのアプローチです。海水中で生物が育つための制限要因は、窒素、燐、鉄、ケイ素の4元素です。それぞれの場所と時に応じて、これら制限要因を施肥で補うことは、海中で生物を生産するために有効です。貧栄養の海に、これら制限要因を除くように適度に施肥することは磯焼け対策になります。当協会では、海水中の制限要因となりやすい硫酸第1鉄を主成分とした海洋施肥剤を長崎県壱岐東部漁協・対馬町漁協、鹿児島県東町漁協、愛媛県遊子漁協、

千葉県房総ちくら漁協・西岬漁協等で試験しており、経過は良好です。

現代社会で生き残るためには、如何にして経費を削減し、収入を倍増するかを常に考えなければなりません。海の森づくりを通して勉強会を活性化し、地域を活性化してゆく。そこに沿岸域の明るい未来があります。

4. Win-Win の関係に向けて

2008年10月に横浜で開催された「第5回世界水産会議」の基調講演で、英国の脳学者 M.A.Crawford 博士は、「人間の人間たる所以は脳であり、水圏動物の不飽和脂肪酸や DHA と海産物に多く含まれるヨードがその脳の発達に欠かせない。これからが水産の時代だ!」と強く訴えました。食料問題、環境問題、健康問題等人類が抱える大問題に対する「水産の役割の重要性」は異論がありません。しかしながら、肉食文化を中心とする西欧文化を主流とした潮流の中でそれらの問題はますます深刻化しております。そして、世界は今や「海の時代」のリーダーシップを海の有効利用の長い歴史を持つ日本に期待しています。したがって、日本はその特徴である

海の森づくり —いつまでも魚が食べられる環境へ

[本書の特徴]

1. 日本の漁業・水産業の現状および課題、海の問題について、豊富なデータとともに分析。
2. 注目を集める「海の森づくり」運動について、国内の成功事例を交えながら藻場の効果や重要性について解説。
3. 温暖海域におけるコンブ養殖法のノウハウを図表とともに解説する。「コンブ栽培マニュアル」を収録。

著者 松田恵明

A5判 168頁 定価2,400円+税
緑書房 刊

第1章 私たちの周りで今、何が起きているか?

- 目次
1. 魚が食べられないって本当?
 2. 漁村の衰退は日本沈没に通ず
 3. 海の問題

第2章 海の森づくりの重要性

1. 海藻・海草って何?
2. 海の森づくり運動って何?
3. 海の森づくり運動. グラミー銀行「海」バージョン
4. 東京ブルーベイ構想
5. 課題: 生産コストの軽減・生産物の利活用

海の森づくり



海を生かす水産モデルを提示することで効果的な国際貢献を果たすことができます。

また、「海の時代」に期待されている海洋開発産業の発展のためには、採算面・環境面・作業面・技術面・制度面など膨大な課題があり、国民の絶対的な支援なくしては不可能です。そのためには、国民の森・川・海・魚・自然・親水性離れを克服する必要があります。そのために最も効果的な方法は、多面的機能を発揮できる沿岸漁業並びに漁村の活性化です。漁村の荒廃は、戦後の行過ぎた経済成長政策の結果であり、その責任は漁民と共に国民にあります。一旦失われた多面的機能を発揮できる漁村の再生は過去半世紀にわたる日本国内での漁村破壊から、日本人全体の Win-Win 関係への脱皮を証明するものです。

私達は、2002年の設立当初から毎年1回シンポジウムを行い、「21世紀の海・魚・人づくり」、「ウーマンズフォーラム魚」、「海と森と里と都市」、「食料・環境問題解決策」、海洋環境と沿岸漁業振興問題解決策、「バイオ燃料」、「海洋施肥」、「海と森の共生」等と「海の森づくり」との関係を議論してきました。さらに、2005年以降、2年に1回こんぶサミットを開催し、「こんぶ」、「環境と食育」、「海との共生をめざした環境と食育と里村づくり」、「海との共生をめざした東京湾の環境修復」等と「海の森づくり」との関係を議論してきました。「海の森づくり」に関心を持つ産・官・学・民の個人・諸団体間のネットワークは年ごとに強化され、輪が広がっています。

現在、国や県の予算も漁協が事業主体となって協議会を作り実施しようとするのではなく、少ない経費負担で事業を展開できるようになりました。漁協の将来を考える場合、漁村起業化組織の誕生や異業種との連携など明るく漁業と漁協 2010・10

い方向性も出ている一方で、地域経済活性化を目指したクロマグロ養殖など大手資本の進出も注目されています。しかし、大手資本の参入が漁協経営維持のための漁場行使料収入となっていることに対する反論も強いのです。本件に関する私の見解は、以下のとおりです。

1) 資本は資本の原理で動くので、採算割れになったら撤退を余儀なくされます。従って、これに長期間依存することはできません。

2) 共同漁業権の管理組合である漁協は、日本が誇る「海の時代」の沿岸漁業管理モデルそのものであり、その多面的機能が期待されています。

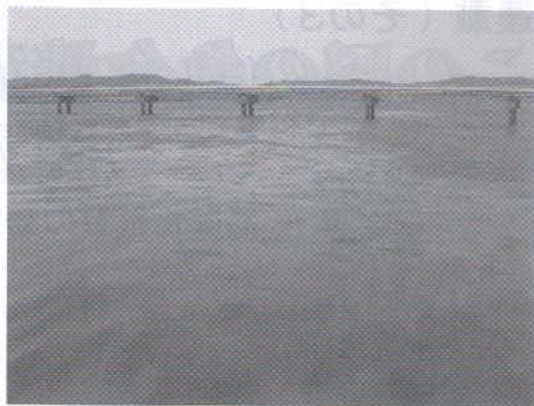
3) 大手資本との連携も異業種との連携の1種であり、そこからの収益は、本来の漁協基盤の強化に回し、漁場管理を徹底し、勉強会を中心とした「海の森づくり」と漁村起業化組織を充実し、環境浄化と水産資源増殖に徹し、生産コストの大幅削減と生産物の付加価値を高めるために使うべきです。

終わりに

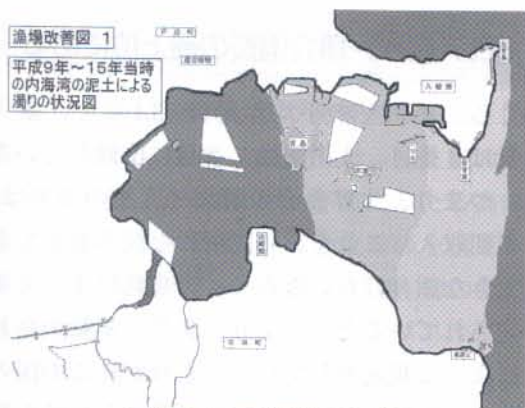
「海の森づくり推進協会」は、月刊誌『漁村』に「沿岸漁業への夢を描いて」という表題のもとで100回以上の連載をされた故郷 一郎先生と深く係わっております。つまり、この運動は、1994年に私が故郷 一郎先生を鹿児島大学水産学部の客員教授として招き、鹿児島県東町漁協と鹿児島大学水産学部との共同研究「鹿児島県における沖合養殖に関する研究」を始めたことから引き継いでおります。2004年に先生が亡くなりましたが、活動は続いております。私達の「海の森づくり運動」は、別名「グラミー銀行‘海’バージョン」です。つまり、一つ一つのロットは小さく



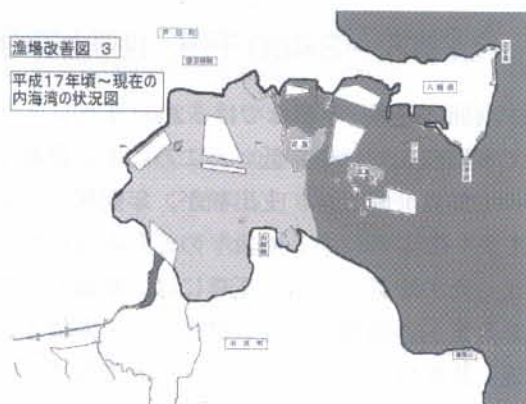
汚濁フェンス決壊前の内海湾 (平成 9 年)



蘇ったホンダワラ (平成 19 年)



汚濁フェンス決壊後の内海湾 (平成 9 ～ 15 年)



回復途上の内海湾 (平成 19 年)

でも、適材適所の発想で必要に応じて活用すれば、沿岸域の地域活性化に繋がります。使うものは、小回りの効くロープであり、ペレットです。

私どもの「海の森づくり」モデルは、汚濁

フェンスの決壊で海藻が全滅した汚濁の海を宝の海に代え、海女の里を復活した長崎県壱岐東部漁協と地方自治体・市民・学校・漁民が一体となって市民活動を続けている愛媛県の宇和海に緑を広げ環境を守る会です。

詳しくは次のホームページをご覧ください。

海の森づくり推進教会 (<http://www.kaichurinn.com>)

宇和海に緑を広げ環境を守る会

(<http://www.uwajimacity-information-development.com/konbunokai/>)

海の森づくり推進協会